「令和５年度　リーダー研修会」報告書

【期日】　　令和５年 12 月１日（金）
【会場】　　ロイヤルチェスター佐賀
【主催】　　佐賀県保育会
【参加人数】　102 名（参集　28 名　・　オンライン　74 名）
【内容】　　研修１　12：30～16：30
『保育の質を高めるマネジメントのために』
講師　佐々木　晃　氏
（鳴門教育大学大学院　学校教育研究科　幼児教育コース　教授）

研修１　　『保育の質を高めるマネジメントのために』佐々木 晃氏

【前編】　質の高い保育実践のために
第Ⅰ部　　非認知能力や主体性が育つ保育とは？
1.主体的な子どもって？
・自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、
よりよく問題を解決する資質や能力
・自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心等
・健康や体力
といった豊かな人間性のもととなるものである。
幼児の主体性とは幼児自身が気づき・感じ・考え・行動する(表現する)
そして更にはその結果を自分なりに責任をとることである。
保育者はプロであるため幼児の主体性を促すための意図的・計画的な指導を
すすめていくことが大事である。
「幼児の主体性」が促された結果
「学びの自立」「生活上の自立」「精神的な自立」の３つが育つ。

2.そもそも、赤ちゃんって主体的な存在である。

・非認知能力はとても大事な赤ちゃんの時期から始まっている資質能力である。

・保育所保育指針の改定で０．１．２歳児の保育に関する記載が充実（増えた。）
今までは養護が中心にかかれていたがそれだけではなく、人、物とのかかわり
赤ちゃんの頃からかかわりの中 学び育っていくというラーニングプログラムの
内容がふえた。自己肯定感、非認知能力の根っこをつくる仕事。
学びは身近な人を通して広がっていく。

・3歳児以上の幼児教育のポイント
幼児教育で育みたい資質・能力それが育っている具体的な姿として「10の姿が
明記された。
日本の子どもたち0歳～18歳まで一貫して育成すべき資質・能力の3の柱
（◦知識・技能の基礎　◦思考力・判断力・　表現力等の基礎　◦学びに向かう
力・人間性等）で育てていきましょうという国の教育ガイドラインである。
10年～40年の育ちに責任が負えるような保育教育である。

・幼児期に育つ大切な力とは？
ヘックマン教授の研究

・IQ（知能指数）を長期的に高めることに、就学前教育による特段の効果は認めら
れない。人間の能力は大きく認知能力と非認知能力に区分できるが、「非認知能力」
のとりわけ、幼児に対する就学前教育が重要である。
心の力の方が人生の成功に大きく貢献していた。
どのような非認知能力かというと「真面目さ、粘り強さ、自制心、忍耐力、気概、
首尾一貫性」

非認知能力（社会情動的スキル）
◦目標の達成　・忍耐力・自己制御・目標への情熱
◦他者との協力　・社交性・敬意・思いやり
◦情動の抑制　・自尊心・楽観性・自信（マシュマロ実験）

子どもたちがアピールしたら必ず応えてくれてしかも必ずリスペクトしほめてあげている。
日本の保育者の素晴らしいところである。
非認知能力に本当は強い。意識してなく非認知能力という言葉を使っていないだけである。
使って保育をアピールすべきときである。
保育は、科学的な根拠をもった専門性の高い仕事である。

3.主体性の根っこは、自己肯定感

自己肯定感・自尊心は　自分の価値を認める気持ち　自信とは　自分の能力や(やり遂げられる)結果を信じる気持ちと言える。

自己肯定感を育てその上に自信をのっけていくことが大事である。

なぜなら自尊心が低い子は　正しい自分の守り方が出来ないという課題がある。

・ある程度大きくなっている子、自尊心が傷ついている子、職場の人にも
　自己重要感・自己有能感・自己好感の３つの言葉のシャワーを！

4.幼児期ってどんな時代？

身体が著しく発達するとともに、運動機能が急速に発達する時期、アクティブラーニングで体を動かせていろいろやりましょうというのが教科書を使わない教育の根拠のその１である。

２つ目は、身体的なものを手掛かりにして、自分自身のイメージを形成し、それに基づいて物事を受け止めている時期である。

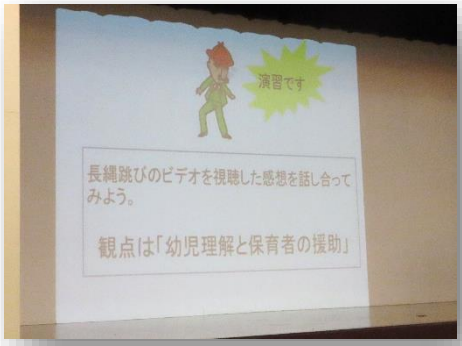
子どもの１番敏感な体を通してポジティブな刺激を与える。

ダメージに強い子、弱い子の境目を遊び体験で何が関係していないかというと「泥んこ遊び」の体験が関係がある。

一瞬にしてリフレッシュするような転機を経験することが大事。
スキャモンの発達曲線…神経系は卒園する頃には 85～90％ができあがる。
複雑な事ができるようになるのは神経系のシナプスがはりめぐらされ賢くなる。
脳科学的には保育は神経系脳のシナプスをどれだけ豊かにはらせてあげるかが
ポイントになる。
栄養と運動が大事。幼児教育はとんだり、はねたり、歌ったり踊ったり、
美しいものを見たり様々なことにふれて身体や感覚神経を動かして
育てていくというのが大事な幼児教育の理論である。

5.幼児の非認知能力を促すのは、保育者の非認知能力である。
子どもたちの非認知能力は、日々の保育の中で保育者が自分で気づいて感じて考えて
やってみるということや失敗から立ち直って粘り強く頑張っていく、
誠実に子どもや人とかかわっていく、人を信頼するということを保育者が
教科書代わりになってやることで育つ。（長縄跳びビデオ視聴）
保育の 5 本柱は、子供を理解、共感、直接かかわり、環境構成、モデル

6.主体性を引き出すクラス経営
ポジティブルールでいこう！ポジティブ「～しましょう」「～したら、～できます」



第２部　　非認知能力や主体性が育つ環境構成と援助とは？

楽しい！ってどんな姿！（事例…泥だんご道・この、がさがさっていうのがええ）

・子どもたちの自己実現はシンプル.楽しい・うれしい・おいしいは,
最もシンプルな自己実現の姿である。自己実現の姿が現れるような
環境をつくっていく。

・「遊ぶ」と「遊び込む」の違いは、夢中になっている。
発展、継続している。
遊びの素材を使いこなし我がものにしている。
子どもたちは遊びの中で、興味や関心をもって
様々な環境に働きかける。すると、新しい発見がある。
「こうすると、どうだろう」という推論が生まれる。
探求心をもってそれらにかかわりつづけ、体得した知識や技能
を遊びや生活の中で使いながら、さらに発展させつつ、自分をも変容させていく。

・遊誘財とは、幼児を遊びに誘い、幼児たち自身によって遊び継がれ、いっそう魅力的な
環境となっていくもの

カリキュラム・マネジメント

・遊んでる様子見て子どもたちが何を学んでいるか、育ちと学びの両方、
心と頭の中の両方をみていくことが大事なポイントである。

【後編】　私たちの課題とマネジメントの展開

・令和の時代は、分散型リーダーシップモデルが必要。分散型リーダーシップ
には、方向づけ・協働的・他者を力づける・教育の４つのモデルがある。

【報告・感想】

これからの時代は質の高い専門性をいかに言語化、見える化、わかる化することが必要で、
意識し伝えていかなければいけない。保育士の非認知能力が幼児の非認知能力を促すことを
考えるとリーダーとしての働きかけ、一人ひとりが役割をもって保育に取り組んでいく組織
づくりの大事さを感じた。「生きる力」を育む教育会のトップランナーとしての責任と専門性
を磨き、子どもたち・保護者・地域社会に貢献できるよう努めていたい。

（文責　とうぶ保育園　野方みゆき）